

# チベット・ビルマ諸語の研究

西 田 龍 雄

## 1

チベット・ビルマ系言語の比較研究にとって一つの時期を画した書物は、これまでに幾種類も出ている。まず Conrady の『インドシナ語の使役出名動詞構成とその声調との関連』(1896)<sup>(1)</sup>があり、それを受けついで Wolfenden の名著『チベット・ビルマ諸語形態論概説』(1929)<sup>(2)</sup>がある。それらは、この分野における古典と言うに価する。また1966年から1974年にかけて刊行された Shafer の『漢蔵語概論』<sup>(3)</sup>は、上にあげた二著がいわゆる形態構造に重点を置いた研究であったのに対して、比較言語学という意図を強く押出して、むしろ言語間の音形対応の設定のみを目指したものであった。Shafer の研究は、漢蔵言語の相互関係を証明するには成功しているとは言い難いけれども、この言語群全般に目を向けて、零細な資料をあさって、漢蔵語全体を一応まとめ上げた功績は高く評価すべきである。1972年に刊行された Benedict (Matisoff 補遺) の『漢蔵語族——概観』<sup>(4)</sup>は、どちらかと言えば Shafer の方向に近いものであった。そこでは cognates の設定に重点を置いて、その分布をさぐっている。そして、Benedict はカチン語を中心に据えた独自の漢蔵語構想を打ち出した。また今世紀のはじめに刊行された Grierson の『インドの言語概観』<sup>(5)</sup>のように、専ら言語群と各言語の概説を目標にした書物の存在も見逃すことができない。

ここで取り上げた A. Hale の『チベット・ビルマ諸語の研究』は、上述の諸研究を発展させたものではない。それらとは全く異質のものであって、一言で言わせていただければ、かなり年代の幅をもたせた学界展望といった感じの強い手引書である。誰々がどの分野でどういう仕事をしたかを概観していて、その背景となるべき各言語の特徴とか言語群の分布地とかについては、残念乍ら全くふれていない。読者は、そこで紹介された文献を実際に読んでみて、各言語に関する具体的情報を知り得るのである。

著者 Austin Hale は、ネパール地域の言語調査に大きい貢献をした著名な研究者で、とくに “*Clause, sentence, and discourse patterns in selected languages of Nepal*” (4 parts) 1973の編著者として知られている。本書の

刊行は歓迎されるものではあるが、含まれる問題は決して少なくはない。

## 2

少し紙面をとるが、まず目次を一覧してみよう。(括弧内の数字は頁数を示す)

### 1 研究展望 (Review of research, 1—48)

1. 1 T-B 言語学の総括的概観 (Global surveys of T-B linguistics 1), 1. 1. 1 要約した概観 (Brief surveys, 2—3), 1. 1. 2 幅を広げた概観 (Extensive surveys, 3—8), 1. 2 文献目録と資料 (Bibliographies and sources, 8—10), 1. 3 言語分類 (Language classification, 10—35), 1. 3. 1 T-B言語の親縁性 (The affiliation of T-B, 10—11), 1. 3. 2 T-B言語の下位分類 (The subgroupings of T-B, 11—35), 1. 4 記述 (Description, 35—48), 1. 4. 1 個別言語の徹底研究 (In-depth studies of particular languages, 35—48), 1. 4. 2 個別体系をまたいだ言語研究 (Cross-languages studies of particular system, 47—48), 1. 5. 1 テキスト (Texts, 48)

2 現在の諸問題の討議と要望 (Discussion of current problems and desiderata, 49—61), 2. 1 音韻論：声調言語への転化 (Phonology : on becoming a tone language, 51—53), 2. 2 形態論：複合的接辞化への発展 (Morphology : on developing complex affixation, 53—55), 2. 3 系統論 (The theory of genetic comparison, 55—59), 注 (59—61),

3 文献目録 (63—155),

言語名索引 (Language index, 157—213)

内容は盛りたくさんだが、いずれも啓蒙的である。1と2の各章は短かい記述であって、本書の主体は、むしろ3. 文献目録とそのあとの言語名索引にあるように見受けられる。

## 3

一章の中では、T-B言語の分類にかなり重点を置いている。一般に系統分類は、言語比較の結果の提示であって、特定の言語がある系統分類表の中で一定の位置を与えられているということは、その言語のもつ何らかの特徴が、その言語群の一員として評価されたことを意味する。

本書の著者は、T-B言語全体について、これまで提示された分類をあげ、それらの相互関連を示している。この点大へん有用である。全体を103系列

(line) に分け (しかし、重複するところが少なくない)、語支 (branch) のたて方と各言語の所属配置について、研究者 (Grierson-Konow, Shafer, Benedict, Egerod, Voegelin-Voegelin, Miller, Roerich, Uray, Nishida, Marrison) の見方の相違がよく判明するよう工夫している。そして、その各系列への配置が、あとの言語名索引と関連するのである。

たとえば系列 8 (系列 22, 23, 24, 25 と重複) は、いわゆる北アッサム語群である。

系列 8	(= 系列 22)	(= 系列 23a)		(= 系列 25a)
a	Abor-Miri	d Hruso	= Taying	g Miju
=	Mishing	= Aka	= Midu	= Kaman
=	Adi	= Tengsa	(= 系列 24b)	
b	Dafla	(= 系列 24a)	f Chulikata	
c	Yano	e Digaro	= Idu	

この言語群を、Shafer は unclassified (Bodic/Burmic) とし、Voegelin-Voegelin は、Gyarung-Mishmi をたててそこに属させ、Benedict は、Abor-Miri-Dafla の中に入れる。Benedict は、22 系列の a が核であって、23a はそれに近いが、24 と 25 は、それからやや離れていると考えた。

もともとの言語群の存在は、1852 年の W. Robinson の紹介などによって知られた<sup>(6)</sup>が、それを体系づけたのは S. Konow であった<sup>(7)</sup>。Konow は、Dafla, Miri, Abor を一群とし、Idus, Digarus, Midzus を別の一群とした。ところが Shafer は、この分類に対して、はじめの三言語は一類としてよいが、あとの三言語を一つにまとめたのは、共に Mishmi と称することからもたらされた Konow の誤りであって、実際には三者の親近性は薄く、T-B の一つの division と指定したくはないと結論して (『概論』P. 179), 「おそらくチベット語群で、ビルマ語群に入る可能性も考えられるが、バラ語群ではないことは確かな言語群」の中に入れて (『概論』P. 3)。

まずはじめの三言語の中の Dafla 語についてみると、Shafer もそうであるが、本書の著者 Hale も Yano 方言と Tagen 方言の密接な関係を認めていない。Hale は上に示したように系列 22 で、Dafla と Yano を並列する単位と見て、Dafla の方言の一つに Tagen があると考えている。しかし N. L. Bor の Yano Dafla grammar and vocabulary 1938 (JASB) によると (Hale はこれを参照していないようである。文献目録にも入っていない)、Yano Dafla と Tagen Dafla は非常に近い言語らしい。Bor の言語資料自体には批判すべきところがあるにしても、この情報は信頼できるのではないだろうか。

「Dafla, 自称 Bengni 族は、アッサムの Darrang と Lakhimpur の北にあたる、西は Bhorelli 河と東は Subansiwí の間に横たわる山岳地域に居住する。大雑把に言う、その地域を半分に分けて、西半分に Yano Dafla が、東には Tagen が住んでいる。この二つの方言は、聞いているとまったく違った言語と思う人があるかも知れないが、書取ってみると、両者の関係ははっきりとしている。語彙にも相違があるが、主に発音に差異がある。……」  
 Bor が対照して提供した豊富な語形のほとんどはよく一致している。たとえば Yano r- : Tagen y- や Yano f- fl- : Tagen kh- などの関係が認められる。両語形が必ずしも規則的に対応しないのは、記述にあいまいな点が含まれているからである。

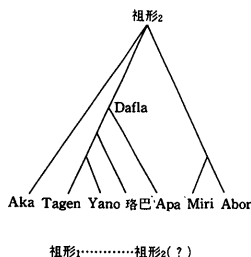
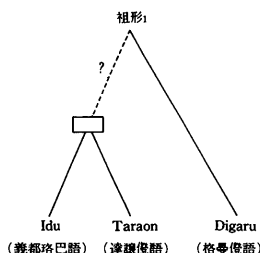
実際には Yano と Tagen が近く、Apa が離れると思われるが、系列22では Tagen と Apa が近く、Yano が遠いように提示されている。

このように言語分類の細部にはなお種々の問題が残っているのである。

筆者がこの北アッサム語群に特別に興味を覚えるのは、最近中国の研究者の報告と密接に関連するからである<sup>(8)</sup>。

Mishmis と呼ばれる言語群は、i) Idus or Chulikottas, ii) Mijus or Kamans, iii) Digarus or Taraons に分けられる<sup>(9)</sup>。Hale の分類によると、i) は上掲系列24bに、ii) は25a, iii) は24aに該当する。この22bの Dafla に西藏自治区で話される珞巴語が極めて近いことは、以前に筆者が証明したが<sup>(10)</sup>、この Mishmis i) には、ごく最近報告された義都珞巴語があたるのである<sup>(11)</sup>。そして、ii) には格曼僜語(kuman)が、iii) には達讓僜語(taruaŋ)が該当する。僜語はしたがって、全く新しく発見された言語ではなく、かなり以前からすでに報告があったことになる。語彙、形式のすべてが対応するわけではないが、その呼称の合致から見ても、この比定は誤っていないであろう。声調の表記に欠ける資料に替って、文法の記述もともなった孫宏開らの新しい信頼できる資料を使って、この言語群のT-B言語の中における位置づけを検討する問題が更び甦って来た。具体的な語形の対応を示す議論は別の一文において述べたいが、概略を言うと、達讓僜語と格曼僜語の間には同源語がかなりあるけれども、それらが共通祖形から直接に受け継いだものか、それとも両者が共通して受入れた借用形なのか明言し難い。しかし Idu 珞巴語と達讓僜語(上述の i) と iii)) は、共通祖形から直接分離したと見てよい。筆者は、次頁のようなおおよその系統樹を考えている。

本書の系列33と34は、狭義の彝語にあたるが、いまでは部族名や地名による分類よりも地域による分類がかなり明瞭に提示されている。なぜ33と34の



二つに分けて、33の方に Mosso を入れるのか、また、Kadu 語などのいわゆる Lui 語群の系列41に、彝語系の Hani (哈尼) 語が所属するのか理解し難い。

言語名索引のところで、Lutze 語は、系列102と指示されている。これは路子を Nung 語群に属すると見ているのだろうか。最近では、いわゆる Sifan (西番) 語群の実態が判明して来て、孫宏開によると (いずれも雲南省に分布<sup>(12)</sup>),

- i) 東部方言 Ersu, Lusu 甘洛, 越西, 漢源, 石棉県など (1万3千人)
  - ii) 中部方言 Dosu (Tosu) 冕寧県 (3千人)
  - iii) 西部方言 Lizu 木里藏族自治州, 冕寧県, 九龍県 (4千人)
- の分類が与えられている。Lutze は、この東部方言に所属するのであろう。

#### 4

文献目録には、豊富な著書論文があげられていて有用ではある。しかし訂正補足すべきところも少なくはない。ここで欠けている重要な文献を大きく補う意図はないが、日本の利用者に追加の情報を多少提供しておきたい。

1) 著者名と書名のみが示されて、それ以外の情報に欠けるもの。

Ballard, E. 1961 *Lessons in spoken Burmese* (Rangoon : Burma Baptist Convention) には、Book I, 1961, iv 159pp, Book II, 1962, x 283pp. を加えるべきで、私蔵本では Rangoon : The Baptist Board of Publication 発行となっている。

Sedlacek, Kamil-B. V. Semičov 1972 *Tibetan newspaper reader* (Leipzig) は、実際には Sedlaček の著書で、Semičov と共著ではない。Vol. I Transliterated and Translated Texts, Short grammatical notes written texts in the Dbu-čan script, 368pp, Vol. II Tibetan-English Glossary, 520pp. (Veb Verlag Enzyklopädie, Leipzig)を補う。これは中国

で刊行された現代チベット語の刊行物を資料とした有用な書物である。

F. W. Thomas, *Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan* は、1933—55年の間に 3 部の書物として刊行されたが、その後第四部が出ている。Part IV Indices 1963, vi 84pp.

Rock, J. F. Ch. 1963 *A<sup>1</sup>Na<sup>-2</sup>Khi-English Encyclopedic Dict.* part I には、part II, 1972, xxx 582pp. 図版多数を追加すべきである。

2) Reprint の指示を加えた方が親切である。

Hunter, *A Comparative Dict. of the Languages of India and High Asia* は、1976年に Oriental Publishers & Distributors, New Delhi からリプリント本 (viii 218pp. Appendix 5 p.) が出ている。

Clark 1893 *Ao-Naga Grammar*……は、*The Ao-Naga Grammar, with illustrations phrases and vocabulary*, Mr. E. W. Clark が正しい書名で、1981年に Giant Publication, New Delhi からリプリント本が刊行された (181pp. )。

Hodson 1908 *The Meithei* (London) と、1911 *The Naga Tribes of Manipur* (London) は、前者が1975年に B. R. Publishing Corporation, Delhi から、後者もその前年1974年に政治学者 H. Horan のまえがきがつけられて、同じ所からリプリント本が刊行された。後者に Hrang Khal Comparative grammar and vocabulary pp. 157—180 とことわっているのは、その書物の Section VI Language の項を指している。

Terrien de Lacouperie 1887 *The Language of China before the Chinese* (London) . このリプリント本は、1966年に Taipei で出ている。148pp. 著書ラクペリーがウィーンで開かれた第 7 回国際東洋学会議に、Philological Society の代表として出席し、この書物の骨格になる内容の Resumé をフランス語で読んだ。時にこの書物がフランス語のタイトルで紹介されることがあるのは、そのためである。

Bell 1905 *Manual of Colloquial Tibetan*, 1920 *English-Tibetan Colloquial Dict.* 2nd edition. [reprinted 1965……, 1st edition was dated 1905 and was called *Manual of Colloquial Tibetan*]. この情報は事実と少し相違している。『英蔵会話辞典』初版といっているのは、1905年の *Manual* の一部であって、*Manual* がのちに文法の部と辞典の部に分割されたと言うべきであろう。文法の部は改訂増補され、*Grammar of Colloquial Tibetan* と題され1919年に刊行されたが、そのリプリントは、昭和17年に京都の法蔵館で作られた。ただし地図は付いていない。『英蔵会話辞典』の方は、1977年に別のリプリント本が出ている (Rakesh Bagai from Rakesh Press, Naraina

Industrial Area, New Delhi)。また最近1978年に、1905年の Manual が、版型を大きくし、序をつけた形で、Kathmandu の Ratna Pustak Bhandar から刊行された。

### 3) 冊数の問題。

Bridges 1915 *Burmese grammar*, 2 vol. [Comment : Richter, WZUL 16-1-2 : 219]. ここで2冊本とするのは Shafer の『目録』にしたがったためであろうか。私蔵本 (1915) は、一冊本である。pt I ~ pt IV からなり (146頁), index i-iv がついている。コメントと言っても Richter がこの書名をあげているのみで、そこには2冊本に関する指示はない。たぶん2冊本は実在しない。

Hsü, Chin-chin 1958 *A bibliography of the Tibetan highland and its adjacent districts* (Peking : Science Press) は、徐近之編『青康藏高原及毗連地区西文文献目録』(科学出版社)のことであるが、英文表題は原著につけられたもので、編者は原著では Hsu Ginn-tze と綴っている。ウェード式にそれを改めるときに誤ったのであろう。その徐目録では、Henderson 1903 *Tibetan Manual* は、2 vols (Calcutta : Baptist Mission Press) となっている。本書では Shafer の目録と同じく2冊本の指示はない。筆者が写真にして手許に置いているもとの本も一冊本であった。Part 1 Preparatory series, Grammatical Notes, and Miscellaneous Exercises (1-118) と Part II English-Tibetan Vocabulary (1-129) から構成されて、頁はそれぞれ改めてつけられているから、あるいは Bell の書物と同じく2冊に分割されて刊行されたことがあるのかも知れない。

### 4) 版数の指示。

Judson 1922 *English and Burmese Dict.* 8th edition, 928pp. 筆者の蔵本の一冊は1911, 7版, もう一つ手許の本は1956 9版である。後者は7版に比べて版型が小さい。Judson の『英緬辞典』は、初版1849, 2版1866, 3版1877, 4版1892, 5版不詳, 6版1906, 7版1911, 8版1923, 9版1956で、頁数は変らない。

1953 *Judson's Burmese-English Dict.* centenary edition (revised and enlarged by R. C. Stevenson and F. H. Eveleth) [2nd printing of 1966 had 1123pp]. Judson が1850年4月12日に世を去ったのち、Rev. E. A. Stevens がモールメインでこの『緬英辞典』を出版したのが1852年である。その後1918年に Eveleth が改訂増補版を出してのち版を重ね、1953年に百年記念版が出た。そこには Dickson の序がついている。京大本は1893年版で序のあとに Addenda (pp. 1-6), Corrigenda (pp. 1-4) がつき、本文1188

頁があって、そのあとに Burmese proverbs, Aphorismus and quaint saying がつけ加わる。筆者の蔵本は百年記念版とその後リプリントされた1966年版である。1953年版にも66年版にも紙や装裱が相違するものが流通している。

Judson の『緬英辞典』が1852年以前にも刊行されている事実を、Quigly, E-P. が発見した。本書の目録の中で、Quigly 1957 “Discovery of the first Burmese-English dictionary” *Burma* 7, 83—87とあるのはそれに関する記事と思われるが未見。それとは別に、1956年に出版された Quigly の小冊子 ‘Some Observations on Libraries, Manuscripts and Books of Burma (London) の Addenda の中で (p. 29), Judson の『緬英辞典』に、1826 年版があることを述べている。同じところで See Author’s article in The Aryan Path, vol XXIII, to be published in 1957とあるから、Quigly は少くとも三ヶ処で、1826年版の『緬英辞典』にふれていることになる。

Ko, Taw Sein 1939 *Elementary handbook of the Burmese language*<sup>4</sup> (Rangoon) 121pp. この著者名は、Tow Sein Ko とすべきであろう。初版 1898, 2 版1913, 3 版1924, 4 版1939. 私蔵本は 4 版である。その後、版を重ねているかどうかは知らない。

Sloan, W. H. 1876 *A Practical method with the Burmese language*, 232 pp. [2 nd edition, 1887, 209pp]. 筆者の蔵本は 6 版, 1923 (210pp.) で、Vocabulary[英緬] (pp. 5—168)のあと、Appendix と文字の説明と Lesson 1 から30までがつづく。この書物は少くとも 6 版までは刊行された。

St. John, Richard Fleming St. Andrew 1936 *Burmese self-taught*. これは Marlborough’s self taught series の一冊で、St. John は ‘A Burmese Reader’ (本書の目録には納められていないが有用な書物) の著者でもある。私蔵本は、fifth Impression とあるのみで発行年が記されていない。

5) 著者名・書名の誤り。

Chai, Yeh-t’ang 1963 “Tsang-yü kai-k’uang” は、瞿霏堂「蔵語概況」であるが、著者のウェード表記が誤っている。同じ著者が p. 80 では Ch’ü Ai-t’ang となり (正しい), p. 81では Chu, Ai-t’ang と書かれている。単純な誤植とは思えない。

Karlgren 1957 *Grammatica serica recensa* (= *BMFEA* 29, 1, 1—332). この書名は大きい誤りで、*Grammata serica recensa* が正しい。1940年の書名も同様に誤っている。1964年に単行本として縮刷刊行され、そのリプリントが台湾で出ている。

6) その他。

Bacot, J, 1912 *L’écriture cursive tibétaine* (Paris) は単行本ではなく、



JA, 1912, pp. 5—78.

Kao, Hua-nien 1952 “Yang-wu Ha-ni yü ch’ü t’an”. *Chung-shan ta-hsüeh hsüeh-pao*, *She-hui k’o-hsüeh* と 1955 “An introduction to the Han language, Yang-wu dialect”, *Sunyatsenia*, Social sciences ed. 1955 no 2. [in Chinese] は同じもので、『中山大学学報』（社会科学）に掲載された高華年「揚武哈尼語初探」にあたる。（あるいは油印本で1952があるのだろうか）雑誌の英文名は、*Journal of Sun Yatsen Univ. social science edition* が正しい。

Wên Yu 1938 The influence of liquids upon the dissolution of initial consonant groups……*JRAS* 69 : 83—91とあるのは、*Nch Bra RAS* が正しい。

必要にして重要な文献を一定の分量に納めるのは確かに簡単な仕事ではない。本書は、ネパール関係の文献に詳しいのを特徴とはできるが、古い文法書とか教科書、それに直接蔵緬語とは関係がなさそうなタガログ語や布依語の論著まで含める反面、Bradley の *Proto-Loloish*, 1979 (Curzon Press), Minn Latt の *Modernization of Burmese*, 1966, Prague や Kychanov etc の *More Pis’men*, 1966, Moscow, 2 vol. などの重要な文献が落ちているのは残念である。

# 5

言語名リストの作成もまた厄介な仕事である。やたらに異った呼称をあげるよりも、標準的な名称を定めて、それとの関連を示すのが肝要であろう。種々の呼び名をアルファベット順で羅列したのみでは相互の関係が判然としない。二、三の例をあげて、著者の扱いを見てみよう。

P. 190 Moso, Mosso, Mossu 3 項目いずれも 33i の指示がある。

P. 191 Muso, Musso, Mussu, Musu 4 項目いずれも 33i と指示。

P. 192 Na-chi, Nahsi, Na-khi, Nasi 4 項目いずれも 33i と指示。

そして系列 33i に、Moso=Musu=Nachi=Nakhi の関係が示される (p. 26)。しかし一方で p. 184 に Lomi=Moso 33i の項目があるが、33i には Lomi は含まれない。この Lomi 語とは一体何を指しているのか詳かではない。

P. 197 に Purig と Purik を同じ項目で扱いながら別に Purik の項があるのは無駄ではないか。しかし Puriki はどこにも出て来ない。また p. 198 で Rebkong と Reb-Kong を別項目で扱う必要はないように思える。同じような例は随所に見られる。

P. 166 Chiutse (=Rawang 40a, 44d, 86b, 103a) Chiuзу (=Chiutse)

P. 178 Kiutze 103a, Kiutzu (=Kiuze) 103a

P. 179 Kuitze=Rawang, 40a, 44d, 86b, 103a

系列40aは Shafer の, 44dは Nishida の, 86bは Egerod の, 103a は Voegelin-Voegelin の分類をそれぞれ反映したものである。

Chiutse とか Kiutze と言っているのは、傣子または曲子の転写であって、これは独龍と自称する民族の他称である。言語名としては、Turung=Trung と呼ぶのが正しい。したがって、Chiutse などを Rawang 語や Nung 語と関係づけるよりも、まず Trung 語と等価値の呼称であることをはっきりとしておかねばならない。筆者は現段階で、この言語群の下位分類をつぎのように理解している<sup>(13)</sup>。

Nu語	1. Nu (怒) 語	1～2 中国雲南省、西藏自治区に分布。それぞれ下位方言がある。
	2. Trung (独龍) 語	
Nung語	1. Gvnøng語	1～5 ビルマ、カチン州に分布。それぞれ下位方言がある。
	2. Tàngsàrr語	
	3. Nung語	
	4. Lùngmī語	
	5. Rvwàng語	

J. Matisoff も類似した言語リストを作っている。本書117頁に掲げられる *Alphabetical list of Tibeto-Burman languages, with their generic affiliations*, first edition, July 1974 (Berkeley : Univ. of Calif.) 41pp がそれで、著者 Hale も参考にしている。Matisoff のリストはその後1980年に改訂増補され、関係者に配布された。The Languages and Dialects of Tibeto-Burman : an alphabetic/genetic listing, with some prefatory remarks on ethnonymic and glossonymic complications. 86pp. 言語リストとしては、どうやら Matisoff の増補本の方が有用であるように思われる。いずれにせよ、言語リストには、Phumi(普米)語(雲南), Jino(基諾)語(雲南), Lhopa 語(西藏), Kokborok語(インド Tripura 地域, ボド系言語), Brokskat 語(ラダック)<sup>(14)</sup>などの新しい言語名も入れてほしかった。

近年、次々と新しい資料が発表され、チベット・ビルマ系言語の研究は、大いに進展している。その折に、この言語群全体を概観するような書物の刊行は意義深い。本書と接して、この言語群の研究を志す人が出現することを切望する。

(Austin Hale : *Research on Tibeto-Burman Languages*. Berlin · New York · Amsterdam : Mouton Publishers, 1983 <Trends in Linguistics. State-of-the arts report : 14> viii 213pp. )

註

- (1) Conrady, A. *Eine indochinesische Causativ-Denominativ Bildung, und ihre Zusammenhang mit den Tonaccenten*, Leipzig, 1896.
- (2) Wolfenden, S. *Outlines of Tibeto-Burman Linguistic Morphology*. London, 1929.
- (3) Shafer, R. *Introduction to Sino-Tibetan*, 5 parts. Wiesbaden : Otto Harrassowitz, 1966—74.
- (4) Benedict, P. *Sino-Tibetan : a conspectus* (Contributing ed. J. Matisoff), Cambridge : Cambridge Univ. Press, 1972.
- (5) Grierson, G. *Linguistic Survey of India*, vol. III Tibeto-Burmman family, 3 parts. 1903—9, Calcutta.
- (6) Robinson, Wm. Notes on the Dophlās and the Peculiarities of their Language. *JASB* vol. xx, 1852.
- (7) Konow, S. Notes on the languages spoken between the Assam Valley and Tibet. *JRAS*, 1902.
- (8) 孫宏開, 陸紹尊, 張濟川, 歐陽覺亜著『門巴, 珞巴, 僜人的語言』中国社会科学出版社, 1981.
- (9) *A Dict. of the Taraon Language for the use of officers in the North-East frontier agency administration*, Shillong の introduction による。
- (10) 西田龍雄「珞巴語の系統」『言語』1979.8。
- (11) 孫宏開「義都珞巴話概要」『民族語文』1983. 6期。
- (12) 孫宏開「多統語簡介」『語言研究』1982. 2期。西田龍雄「新しい言語と新しい文字」『言語』1983. 2。
- (13) ビルマの Nung 語の分類は, Morse, R. Syntactic frames for the Rvwàng (Rawang) verb, *Lingua* 15, 1965による。なお孫宏開『独龍語簡志』民族出版社, 1982 を参照。
- (14) 西田龍雄「チベット語の歴史と方言研究の問題」西田編『チベット文化の総合的研究』1983, 京都大学文学部, 参照。